

実りの秋

東川の町中にも紅葉が下りてきて、朝晩はめっきり冷え込むようになりましたね。今年のお米はととも味が良いようですが、皆さんもう新米は口にされたでしょうか？

秋といえばスポーツの秋、芸術の秋、読書の秋…とさまざまに表現されますが、やはり実りの秋です（食欲の秋とも言いますね）。秋の実りは動物たちの動きにも大きく関わりますし、植物たちにとっても来年に向けて子孫を残すための勝負の季節でもあります。今年は山でも木の実の実りが良く、ヒグマが里に出る心配も少し減るかも、という話もあり、少し安心すると同時に冬眠に向けて動物たちがおなかいっぱい食べることができると良いな、と山に思いを寄せます。

町中で見る木の实の中では、一番目立つのはナナカマドの実でしょうか。真っ赤な実には冬に雪をかぶっている様子を見かけることも多いと思いますが、他の木の実と比べてやけに長い間見ることが出来るな、と不思議に思われる方もいるのではないのでしょうか。



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。



幼児センターのナナカマドの実をいばむギンザンマシコ（昨年1月）

実はこの実、ソルビン酸という殺菌効果が強くカビや細菌の増殖を抑える働きがある成分を含んでいるため、長い間腐らずに鮮やかなまま木についていることが出来るのです。きっと長い間鳥に食べてもらって、種子を広範囲に散布してもらうためにこの形に行き着いたのでしょう。進化の不思議さを感じますね。

ちなみにこの実、人間が食べてもとっても苦くておいしくないのに、赤くておいしそうに見えても食べないようにしましょうね！

東川自然保護官事務所自然保護官 岸田 春香



本で知るふるさとこの山

町史編集専門員 西原義弘

天野市太郎のペーパー登山口

終戦の3年後、1948（昭和23）年に旭川の小学校教師、天野市太郎が「大雪山登山案内」を東京の「日新社」から発行しています。食料はもろろん、さまざまな物が不足していた時期に、充実した登山ガイドブックが出版されていたのです。本の定価は200円で



小学校教員だった天野市太郎が戦後まもなく書いた『大雪山登山案内』

案内書には手書きの図面やスケッチを入れ、旭川から東川まで、東川から志比内まで、それぞれの行程を丁寧に紹介しています。旭川電気軌道の電車と、木材運搬トラックに便乗する以外はすべて徒歩です。登山口は松山温泉と勇駒別温泉（現旭岳温泉）を中心に、層雲峡、愛山溪の4地点からさまざまな縦走コースを提案しています。

天野は、沼ノ平から旭川市東旭川ペーパー（米飯）へ下るコースを「面白

白い将来性が隠されている」と紹介しています。1954（同29）年、第9回国民体育大会山岳競技が大雪山で開催されたとき、D班コースとして「ペーパー」松

登山家でもあり、松山温泉（現天

仙園↓永山岳↓比布岳↓黒岳↓北海

峡温泉）から旭岳へ登り始めたのが14歳からで、「大雪山は俺の山」と豪語するほど良く登りました。そのころは谷川を渡り、断崖絶壁を這うように進み、温泉宿は小屋同然、そんな時代から通っていました。

その後も天野は、東旭川地域の人たちや家庭教育懇話会でペーパーから登山を繰り返して、大雪山に最も取りつきやすい登山口として維持発展に努めました。今は知る人が少なくなりまし